

公園愛護会活動の現状と 未来の可能性

Current Status and Future Possibilities of Park Patronage Association Activities

5

梶田 里佳 一般社団法人みんなの公園愛護会 代表

Rika KABATA (Representative, Minna-no Koen Aigo Kai (Parks-Friends; General Incorporated Association))

1. はじめに

みんなの公園愛護会は、公園ボランティア活動を応援する非営利型一般社団法人です。公園愛護会をはじめとした各地の活動を、点在する情報の可視化と共有でサポートしていこうと2020年に設立しました。これまで全国の自治体及び公園ボランティアの担い手を対象にした公園ボランティア実態調査を行い、調査レポートを公開してきました。同時に、個別の公園ボランティアの活動を取材し、活動の様子や活動を続ける中で培ってきたコツや工夫、やりがいなどのリアルな声を集めて情報共有を行ってきました。

今回は、これまでに私たちがお聞きした多くの皆さんの声をもとに、公園愛護会活動の現状や未来の可能性について、書いてみたいと思います。

2. 公園ボランティアの現状

(1) 地域の公園は地域の人々に守られている

暮らしの身近にある公園を、地域みんなの庭として気持ちよくしておこうと活動をする人は時代や地域を問わずいます。活動内容としては、清掃や除草、落ち葉かき、花植えなどが基本ですが、花や緑育てを通して地域の交流の機会を作ったり、多世代が楽しめるイベントを行ったり、地域交流拠点として公園を活用している人たちもいます。また地球環境保護の視点から、落ち葉や草の循環管理に関心を持つ人や、地域での小さな循環づくりに取り組む人たちも増えています。

このような公園ボランティア活動への支援については、1960年代から「公園愛護会」などの名称で自治体ごとに支援制度が整備されていきました。制度開始から60年以上経ち、時代に合わせて柔軟に変化対応し

ながら継続している自治体もあれば、新たに制度を設ける自治体もあり、公園ボランティアを物質的・金銭的に支援する自治体は増えています。公園愛護会、アダプト、里親、管理会など様々な名称がありますが、私たちはまとめて「公園ボランティア」と呼んでいます。また、公園ボランティア制度がなくても、自治会・町内会で地域の公園管理を行っているという自治体も多く、とくに街区公園などの小さな公園では、地域の人々の協力があって公園が維持されていると言えます。

(2) 課題と言われる高齢化と担い手不足

全国自治体調査で公園ボランティアの抱える課題について聞いたところ、「担い手の高齢化による活動量の減少」が最も多く、地域を問わず共通の課題として1位になりました。公園ボランティアの担い手を対象に行ったアンケート調査では、回答のあった団体の9割近くに70歳代がいて、半数以上の団体で70歳代が活動の中心を担っているという結果が出ました。80歳代のメンバーが活躍している団体も少なくありません。メンバーの高齢化や減少によって活動範囲を縮小せざるを得ないという声もあります。

70歳代になっても仕事を持って働く人が多い現代では、地域活動を始める人の年齢も上がっているようです。新しい参加者が増えないことで、メンバーが固定化し孤立感が高まってしまうこともあります。たとえば、参加するのはいつも同じ顔ぶれ、高齢や酷暑で作業が難しくなる中、公園のポイ捨てごみの量や草の勢いは変わらず、協力者はいないという状況を想像してみてください。ボランティアのはずが、これではさすがに厳し過ぎます。残念ながらやりがいはなく義務感で行っているという声もあるのが実情です。

(3) 退職後の社会生活・健康維持・楽しみとしても

もちろん、楽しく活動している人は多くいます。退

職後の地域活動や社会生活の場として公園ボランティアに参加する人や、地域を守る活動にやりがいを持って取り組んでいる方も男女問わず多くいます。定期的な外に出て体を動かすため、健康維持にも効果的だという声も耳にします。

元気なシニア世代だけでなく、子育て世代などの若い世代もしっかりと存在しています。公園を利用する子どもたちと親世代で、遊びを交えて楽しくやっている人たちもいますし、赤ちゃんから80歳代まで地域の多世代で、ご近所さんと交流しながら公園ボランティア活動をしている人たちもいます。

3. 公園ボランティア活動がもたらす効果

(1) 公園美化に地域の人の力は必須

明るくきれいな公園は子どもにも大人にも人気がありますが、手入れが行き届かず放置されがちな公園では、ポイ捨てゴミが散乱し、草は伸び放題、近隣の家に飛ぶ大量の落ち葉など、ともすると迷惑施設と言われるトラブルの元にもなってしまいます。公園ボランティアは、毎月1回の活動を公式活動としている団体が多いですが、毎朝のゴミ拾いを日課にするなど個人活動をしている人も多く、報告書などに記載されない活動も含めると、かなりの頻度で公園に人の手が入り、愛情が注がれていることがわかります。

ゴミのない公園や、季節の花が咲く公園は、地域の人々の協力なしでは成り立ちません。地域の公園が魅力的な空間であり続けるためには、地域の人々の力は今もこれからも必須だと言えるでしょう。

(2) 維持管理コストの削減だけではない大きな価値

全国自治体調査では、公園ボランティアがもたらしている価値や効果について、「街区公園の維持管理コスト削減」と並んで「地域住民による公園利用の活性化」という回答が最も多くありました。そのほかにも、高齢者の健康維持やご近所見守り効果、地域における多世代交流、周辺地域の防犯などの回答が上位に上がりました。公園ボランティア活動は、公園の維持管理コストの削減と同時に、公園を中心とした地域活動や住民交流にも有効であると各自治体担当者にも認識されていることがわかります。

4. 地域を楽しくする各地の公園ボランティア

このように公園ボランティア活動で、公園が明るい場所になるほか、地域にさまざまな影響を与えています。以下、いくつかの事例を交えてご紹介します。

(1) 地域の繋がりと会話のきっかけづくり

横浜市港北区の師岡打越第三公園では、30年続く公園愛護会を子育て世代にバトンタッチし、子どもからシニアまで多世代で楽しく活動しています。新しく引っ越してきた家族を公園掃除に誘い、おしゃべりしながら一緒に作業をすることで、ご近所さん同士の世代を超えた繋がりがづくりができたといえます。

一年草中心で植え替えとメンテナンスが大変だった大きな花壇を、多年草や宿根草、球根などを多用したナチュラルスティックガーデンにし、お手入れがラクで、季節の移り変わりの美しさも楽しめる花壇にリニューアル。毎月の公園愛護会活動でのお手入れ作業は子どもたちも大活躍しています。

楽しさが伝わるお知らせや、写真やイラストつきの活動報告を公園内に掲示したり、SNSでオープンに



写真1 師岡打越第三公園の花壇は看板も手づくり



写真2 お手入れ作業は子どもたちも大活躍

活動を告知したりするなど、時代に合わせて運営方法も工夫をしながら、楽しんで活動されています。

(2) 公園を舞台に地域みんなで楽しく子育て

藤沢市の高谷下公園では、3人の息子を持つお父さんが公園愛護会を立ち上げました。基本的な活動は、公園の清掃と除草、落ち葉かきなど。加えて、公園で見られる虫や植物の観察、体操教室、フリーマーケットなどの企画も続々と行っています。破損してしまっていたフェンスの編み直し、砂で埋もれていた砂場の枠の発掘など、自分たちでできる公園メンテナンスも、子どもたちと一緒に楽しく実施しています。

公園愛護会の活動をきっかけに、公園をもっと楽しみ、地域の人たちといろいろな会話をしていきたいというのも立ち上げた理由の1つとのこと。ゴミ拾い中心の公園清掃は、毎週ちょっとずつやるのが効果的だと考え、毎週土曜日の朝にラジオ体操やかけっこ教室など公園に人を集める楽しい活動を企画。公園に遊びに行き掃除して帰るといった雰囲気大切にしながら、地域の親子で意欲的に活動をしています。

(3) 三世代交流で音楽イベントや賑わいづくりも

東村山市の稲荷公園では、神社の横の公園を地域の交流の場にして多世代で楽しむ「大袋稲荷三世代交流(通称おいなりさん)」の活動が10年続いています。子どもの頃遊んでいた鎮守の森の公園が、遊具は老朽化により撤去され、誰もいない暗い公園になっている状況を見かねた近所のお父さん仲間やご近所さんを中心に、まずは定期的に掃除だけでもやってみようという活動をスタートしたのがきっかけとなり、花壇づくりや、プレーパーク、大きな木を生かしたロープ遊びなどを開催。みんなで知恵を出し合い、実験をしながら、楽しい活動を増やしていくうちに、毎年恒例となる500人規模の音楽イベントまで開催するようになりました。



写真3 おいなりサンデーの様子(写真提供:大袋稲荷プロジェクト)

毎月の活動は、そうじ+子ども遊びイベントで、ロープで作るハイジブランコやターザンロープ、モノづくりワークショップなど毎月楽しい企画を考えて実施。占用許可を年間計画で申請しキッチンカーを呼んで更なる賑わいをつくるなど、地域の様々な人が公園に集まり楽しく交流するきっかけをつくっています。

神社や自治会との繋がりが大切に、地域の理解や協力を得ながら地域密着で行う活動は、市役所のバックアップがあってこそ実現できたといえます。市役所担当者も一緒になってやってみようという進め方によって、その後の協定締結に繋がりと、物品や備品の提供や貸出協力を得られる体制の構築ができたということです。

(4) 野菜も米も電気も作る自給自足公園

茅ヶ崎市の五郎兵衛コミュニティパークでは、4種類の野菜を育てる畑に、小さな田んぼ、早めのお花見が楽しめる春めき桜、季節の花が楽しめるいくつもの花壇、梅やびわ、ブルーベリー、栗などの果樹、ブドウやキウイの棚、水を得るための井戸、畑の上にはソーラーパネル、などとてもたくさんの植物と人、そして鳥や虫も共存する楽しい空間になっています。

ここはJR相模線の新駅用地として茅ヶ崎が取得した土地で、長い間荒廃地のようになっていたところ自治会長を中心とした地域住民が立ち上がり、開発が始まるまでの期間、地域コミュニティの場として暫定有効活用しているものです。「畑をやってみたいね」「元々田んぼだったから、田んぼもやってみたいね」という皆さんの様々な思いを起点に、話し合いを繰り返しながら、市や多くの人の協力で、今のようなコミュニティパークが出来ていきました。

「駅と緑と絆の会」の皆さんは、年間計画で農作業やお楽しみのイベントを行っています。2005年の活動開始から、桜まつり、秋の収穫祭、田んぼで採れたお



写真4 地域みんなのオアシスを育む駅と緑と絆の会の皆さん

米での餅つき大会、芋煮会などを行ってきました。収穫物は、参加者みんなで公平に分配。そして、何か問題があってもそれをオープンにしてみんなで解決策を考えるという運営方針にも、公平性を大切にする姿勢が現れています。お互いの知識や技術を持ち寄って話し合いながら運営することで、メンバーの皆さんの「やってみたい」がどんどん実現しているようです。

(5) 公園の利活用やルールづくりも地域みんなで

姫路市の阿成北公園では、公園のあるべき姿や方向性を、地域の人みんなで一緒に考え実践する取り組みを行っています。公園愛護会活動を充実させる仕組みづくりを考えるとともに、公園でのイベント開催、花火やBBQをやりたいという市民のニーズを、住民と一緒に考え、柔軟な公園の使い方やルール作りを考えていこうと市のパークマネジメントのモデル公園としてワークショップを実施しました。

ワークショップは、町内放送でも参加を呼びかけ、公園を毎日利用する子どもたちやご近所さんも含めて多様な人が参加。子どもたちの意見も積極的に聞き、年齢や立場を超えて自由に意見を出し合ったことで、公園の使い方イメージや可能性が広がったそうです。ベンチが少ないという声を受けてベンチづくりをしたり、大きく育ってきたシンボルツリーのメタセコイヤの木の高さや形の目標を話し合ったり、公園に行きたくなるプログラムのアイデアを出し合ったり。それを受けて、消防団も協力のもと大人たちの本気の花火大会を開催。地元の建設業者が重機を出し、公園の土の中に宝を埋めて子どもたちが宝の地図を持って宝を探すという、本格宝探しイベントも行われました。

できるだけ禁止事項を減らし、みんながやりたい事やっいていこうと、町内会・老人会・消防団・子ども会で毎月公園の使い方を話し合いながら独自のルール作りを実施。日常的に住民たちがBBQで公園を利用しているほか、夏祭りやお正月飾りを焚き上げるとんど焼きなど地域イベントも行っています。

5. 公園ボランティアに関わる人を増やすために

上でご紹介したのはほんの一例ですが、公園をきれいにしながら、地域の人々の多様な「やってみたい」を実現し、公園を積極的に面白く利活用している人たちは各地にいます。公園ボランティア活動で、地域の公

園がより魅力的な場所になる可能性は大いにあると言えるでしょう。そのためにも公園ボランティアの裾野を広げていくことが重要だと考えています。

(1) ボランティアだから、楽しく無理なくが基本

公園ボランティアは清掃や除草などの公園管理作業を行っています。あくまでもボランティアで、行政の下請けではありません。長続きの秘訣は、「無理なく楽しく」行うことだと多くの担い手が語っています。

(2) 作業がラクになる管理方法やノウハウも重要

そのためには、必要な作業を効率的に行う方法や、使いやすく効果的な道具、身体に負担の少ない便利グッズなどの環境整備も大切です。作業がラクになる管理方法や実践のノウハウを、専門家や行政も含む様々な人の知恵を集めて広めていけると、過酷な作業を孤独にやり続ける人たちの助けにもなります。地域住民が楽しみながらラクにお手入れし続けていくことを優先的に考えると、公園を整備する段階からこれまでとは違った発想の転換が起きてくるかもしれません。

(3) やってみたいを一緒に応援するサポートを

公園でこんな楽しいことをやってみたい、地域の人たちとあんなことできたらいいなというアイデアを持った公園ボランティアの人は多くいます。先ほどの例をはじめ先進的な取り組みを行っている公園は、地域住民の「やってみたい」を行政が認め応援・連携することで、ここまで実現し継続しているようです。

機会は平等に設けながら、やる気があるところはどんどんやれる、新しいアイデアを歓迎し、「やりたい」を潰さないことも立派な支援です。公園ボランティアが楽しく活動できるための技術的・物質的・精神的な支援が充実していくことで、各地の公園がより魅力的な場所になっていきそうです。人々が自分の暮らしの中で「推しの公園」を持ち、仲間と一緒に育てていくこと。行政はその後押しができれば面白いのではないのでしょうか。

私たち「みんなの公園愛護会」も、公園ボランティアの裾野を広げるため、公園ボランティアの楽しさを伝える書籍づくりに現在取り組んでいるところです。

こちらでご紹介した公園ボランティア実態調査の詳細については、以前本誌でも報告の機会をいただいたほか、すべてのデータを当法人のWEBサイトで公開しています。ご興味がある方はご覧いただければ幸いです。<https://park-friends.org/>